

「利根川水系中川・綾瀬川河川整備計画（原案）」に対する公聴会

日 時：令和5年4月9日（日）13：00～13：20

場 所：国土交通省 関東地方整備局 江戸川河川事務所

発言者：公述人1

それでは発表させていただきます。越谷市内を中心に植物、昆虫、鳥などの生き物の観察を行っております。■■と申します。よろしくお願いいたします。

公開された整備計画（原案）の草文には基本的に賛成です。ただ、具体的にどのようなされるのかが読み取れない部分があります。すでに検討されている事項も多いと思いますが、発言させていただきます。

パワーポイントで示してございますが、今日私が聞こうと思っているところは、この部分でございまして、自然環境の保全と創出の中のこの部分、特に中島のサギ類の集団営巣地について伺いたいと思っております。

中島サギ類の集団営巣地でございますが、このようなところがございます、埼玉県内のサギ類の集団営巣地の大規模なものは、中島サギ類の集団営巣地と、その他数えるほどしかございません。中島の営巣地は他の営巣地と立地環境が異なっており、住宅地との隔離距離が比較的あるような状況であり、間に河川、それから道路を挟んでいるような状況でございます。このため、住民との軋轢が少ないと推察されます。また、周辺にサギの餌場となる水田があるという貴重な場所でございます。ここでサギ類が3月中旬頃から9月中旬まで営巣しております。最近では約3,000羽が営巣することとされています。集団繁殖するこのようなサギですが、集団繁殖するサギの種類はコサギ、チュウサギ、ダイサギ、アマサギ、アオサギ、ゴイサギの6種類です。このうち埼玉県のレッドデータブックに乗っているものが、コサギ、チュウサギ、アマサギでございます。チュウサギに関しましては、国のレッドデータベースにも載っているということでございます。

次に、位置を確認しますと、中川と新方川の合流点ということで、サギ類の営巣地は中川と新方川の合流点の直下流にありまして、この付近で支川合流対策と堤防の整備、それから河道掘削が予定されていると資料に記述されております。この図面からは今回の整備計画の堤防整備は左岸側のみで、サギ類の営巣地には着手しないと読み取れますが、いずれ右岸の営巣地も施工するものと推察します。大規模な公共工事を実施するにあたっては、環境に与える影響を考慮する必要があります。ここでは貴重な中島のサギの集団営巣地を保護することを目標として立てられていると存じます。

さて、工事に当たりましての環境保全措置、いわゆるミティゲーションは、一般的に優先順位としましては回避、低減、代償と言われますが、先ほど見ましたように新方川との合流点にあることや、河川勾配が緩く潮汐の影響もある可能性があることから、通常の工法では回避する措置というのは取れないと思っております。工事計画にあたっては上下流

の護岸区間と一律の設計にするのではなく、影響を極力低減するような手法や工事時期とすべきと考えます。堤体の法面勾配を1：3とすると改変面積が多くなり、サギ類の営巣に影響を与える可能性があると考えられます。堤体の法面勾配を他のところと変える等、検討していただきたいと思っております。

また、河道掘削区間に該当いたしますので、河川の断面形状等を十分に水理学的に検討して営巣地に与える影響を最小限としていただきたいと思えます。

なお、工事にあたっての河川沿いの樹木の伐採は、必要最小限にとどめることも必要と考えられます。工事による河川の形状変更などが営巣地に及ぶ場合に、営巣可能な場所を他の地点に整備し、サギ類をそこに誘導し分散させるなどの代償措置を検討しているものと拝察します。この際、サギ類の集団営巣地を誘導し、他の場所に移した例は少ないことから、時間をかけて試すことや、実施するにあたっても順応的管理の考え方が必須と考えております。このため、学術経験者などによる検討や、実験的に他の場所へ誘導する試みなどを事前に行い、実際の工事に備える必要があると思えます。サギ類の繁殖は一年ですので、試験自体は数年以上かかる可能性があると思えます。成果が確認されてから、実際はそういう工事を行うべきと考えます。

流域治水ということで、国で河道の改修のみでは、洪水被害を完全に防ぐことはできないと判断して、流域治水の考え方を進めているものと理解しております。現在、校庭などを利用した一時貯留施設などを見かけますが、水田の雨水の貯留機能、自然生態系の機能などに着目して、さらに水田の保全を推し進めるべきと考えます。この図に示しているのが越谷市における水田面積と洪水被害の推移の図でございます。水田面積が1982年ぐらいから減少しております。それに従って、同程度の降水量でも浸水被害が増加しているようにも読み取れます。

次に、水田の有無による河川流出量の違いということで、これも三重県でシミュレーションされた例だと思えますが、一時的に貯留して流出のピークを遅らせる働きがあるということで、水田は流域治水の観点からも、その面積や機能を維持し、貯留能力を維持させることが必要と考えております。今、流域治水で重要視する水田でございますが、この文献によれば、サギを頂点とした生態ピラミッドが考えられておまして、アンブレラ種ということで、サギの営巣地を保護するだけでなく、サギの餌場となる周辺の水田も保全し、地域流域の生物多様性を保っていくことが、生態系の微妙なバランスを保つ上でも必要と考えられます。河川を中心により良い生態系ネットワークを形成していただきたいと願っております。

実際にこれは私が実施した観察会で使った資料ですが、上位にこういうものがいて、下の方に希少な植物とか昆虫がいるという例で、こういうことの活動もしておりますので、参考までに示します。

これは越谷市内の水田で採餌するダイサギでございます。次に、草加市内の柿木町の田んぼで採餌するアオサギですが、ここの田んぼは開発されまして、もうこういう風景は多

分、見られないという状態で、田んぼが減っているということでございます。繰り返しますが、工事後もサギの集団営巣地を維持させるためには、河川工事の影響が軽減されることと、採餌に十分な広さの生物多様性に富んだ水田が周辺にあることが必要です。

ある時、ネットを探しておりまして、高校一年生の女生徒が中島サギの集団営巣地の保護について論文を書いて、佳作として入賞しております。「サギコロニーを未来へ繋げるために」と題した論文を挙げておりまして、内容は現地調査や資料を読み、江戸川河川事務所へのインタビューをして、存続させる方法について述べております。その中の最後のところで締めといたしまして、高齢者から子どもまで、地域住民全体でサギのを知り、保全に向けて動くことが、サギのコロニーを保全させる第一歩になると思うと結んでおります。

本年三月末には新しい「生物多様性国家戦略」が閣議決定されております。これも踏まえてさらなる検討をしていただきたいと思います。この基本計画、基本戦略のところで、「生態系の健全性の回復」という項目の中で主な指標として一つ挙げられているのが、『取組方針・目標を定めている「河川を基軸とした生態系ネットワーク」の数』となっておりますが、数だけでなく内容、質が重要ですので、中川・綾瀬川流域の治水が他の河川の見本となるような素晴らしい対応をされることを願っております。

短い公述ですが、これで公述を終わらせていただきます。以上でございます。